

<特別寄稿> モルディブレポート (1)

北嶋 信義
(昭和47年建築科卒)

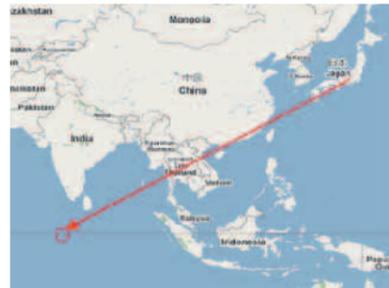


Vol.1 設計編

●依頼

寺院の設計が縁で、15年前から懇意にしている住職から「モルディブに、日本の文化を広める施設『茶室やレストラン』の設計をお願いしたいオーナーがいるので会って下さい」との連絡があった。彼は英語の教師をしていた約40年前から国際交流を進めている人で、昨年は日本から資金を募ってスリランカに小学校を建設するなど、ボランティア活動にも献身的に取り組み、現地人から非常に感謝されている人でもある。モルディブ？ 早速、漠然としか覚えていなかった『モルディブ』を調べた。

- 位置：日本から約8,000km(スリランカの南西約700km)にある群島国家。
- 面積：佐渡島の約1/3(298km²)で、洋上に浮かぶ『真珠の首飾り』のような珊瑚礁の島々の数は約1,200を数え、その多くが無人島で、人が住んでいる島は200足らず。各島の大きさは、100m²~2km²。『リゾート』と名の付いている島は90に過ぎない。
- 海拔：平均的な海拔は2m程度。「地球温暖化の影響を受けて2000年には海中に沈む」と言われていた。海面はその後上昇してはいるが、珊瑚礁も環境に適応しているようだ。
- 人口：約30万人(首都マレは、約2km四方に約10万人が住む世界一人口密度が高い都市)
- 言語：現地語の他、リゾートでは英語、イタリア語、ドイツ語、etc.
- 気候：年間を通して平均気温26℃~33℃、11月~4月頃は乾期で比較的油だやか。5月~10月頃は雨期で、時々モンスーンの影響を受ける。
- 時差：日本-4時間。



衛星写真
全体で約1200もの珊瑚礁の島々
(写真のラーバー礁はほとんどが無人島)



首都マレの航空写真
約2km四方に10万人が住む、
世界一人口密度が高い都市

●工事を行う前のVADOO ISLANDリゾート(5分前後で一周できるワドゥー島) スノーバダイビングでも人気のワドゥー島周辺は、世界一透明度の高い海といわれている。



ワドゥー島全景と透明度の高い海

●モルディブにジャパニーズスタイル

モルディブのVADOO ISLAND(ワドゥー島)は、日本の『駿台予備校』が、25年前から持っていた権利を、2007年11月にスリランカの『アダラーン』というリゾート会社に移譲したものである。(以前のリゾートは、竹中工務店の設計施工で、モルディブにおける水上コテージの草分け) ちなみに『アダラーン』は、スリランカやモルディブに9つのリゾートを所有し、今後ドバイ、南アフリカ、ロシアなどに進出する機会をうかがっていると言う。

改築工事に当たり、「新設水上コテージを50棟、そのうち『6棟を純日本風』にし、既存コテージの一部を『茶室』に改造、既存レストランの2階を改造して『日本食レストラン』をつくる」などが求められた。モルディブの他のリゾートには無い『日本風』で、差別化をはかるねらいがあるようだ。



工事前の既存水上コテージ

「現地調査は、4月14日~19日としますから、必ず来て下さい」とこちらが「引き受ける」と言う前に一方的に決められた。

●現地調査

2008年4月14日、成田空港から直行便(新婚旅行者等で満員)で約10時間かけてついた所は、あまりにも美しく、「こんなにきれいな景色があったのか」と生まれて初めて見る光景に驚いた。船と水上飛行機で各リゾートをめぐる、主にヨーロッパ(イタリア、フランス、ドイツ等)からの、長期休暇を楽しむ旅行者で賑わっていた。また建設地のワドゥー島は、『スノーバダイビング』を楽しむ日本人のリピーターが多かった。



既存建物の水上バー(ビッグハット)(左)と既存船着き場(右)

地元の設計者(スリランカ在住のイギリス人)からのアドバイスは「施工精度が悪いのでクリアランスを多く取ること」、技術者については日本の職人のように大工、左官など細かく分かれていないとのことだった。調査を終えた段階で「設計図を持って5月下旬に来て下さい」と基本設計の完了日を決めるにも、こちらの都合は無視された。

●基本設計編

2008年5月25日現地で行った基本設計説明会は、オーナーはじめ約15名のスタッフが参加して行われた。

持参した木材、自然石、和紙などのサンプルを使いながらコテージを、『真』『行』『草』と三つのタイプに分けて、具体的なデザインを提示し、概ね了承された。説明の途中で「今度6月中旬に中国へ資材調達に行くので同行してください」と突然言うオーナーだった。

説明を終えると「作業員を現場に待機させているので指示してほしい」と言うので直ちに現地へ。現場はひと月前とは大きく異なり、既存施設の解体作業中だった。水上ではH型鋼の杭打ち作業がほぼ終了し、腐食して穴があいた鉄板を並べた「水上足場」も完了していた。



説明会状況



完成予想図



現地の作業員へ基本計画の概要を説明



オーストラリア製の
自走可能な海中杭打機

●建設資材調達

6月14日「資材調達は中国から」と、自ら言うオーナー達と上海で再会した。8月にオリンピックの開催や、2年後の『上海万博』を控えていた中国は、かつての日本のように建設ラッシュだった。

いくつもの大規模プロジェクトが同時進行中で、高さ100mを超すビル群や竹の足場を見て『中国人のパワー』を感じた。「今回工事に必要な建設資材は、何でも安く手に入る」と思っていたが、もともと上海には家屋用の木材はほとんど無く、輸入材を販売するのが一般的なようだった。

結局要望する木材は得られず、7月中旬に日本から輸出することが決められた。竹材や紙材、畳などは産地で現物を確認して、中国から輸入することとなった。

●木材輸出

材料の手配まで要求されるとは思わなかったが『茶室用木材』は秋田杉の皮剥丸太、コテージ用として『秋田杉やヒバ』を調達し、12mと6mのコンテナに詰め込んだ。



資材調達状況
コンテナに積みため含水量などを急急にチェック

9月初旬に約40日間の予定で秋田港から船を送り出したが、到着の連絡がないところをみると、木材はまだ洋上にいるらしい。

●今後は……

現在日本語と英語を併記した実施設計図も完了した。木材の到着を待ってよいよ現地に乗り込み、施工の段階となるが、あらかじめ日本で加工した木材等(丸太の隅木に丸太の垂木の本組など)を日本の大工が手本を示すことになっている。それを地元の職人(インド人やバングラディッシュ人等)へ伝え、完成させなければならない。地元の職人らは、日本の『マキタ』製の木工用電動工具を器用に使いこなしていた。だが、鋸は造作に向かない三角形の『バラメ』だった(日本の型枠大工の様)。すべて日本の職人だけで造りたいと申し入れたが、予算上無理と判断された(物価は日本の約1/5で、職人の手間は約1/10)。いろいろ心配は尽きないが、彼らに期待するしかない。

「<特別寄稿>モルディブレポート」の続編(施工編)は、次号(Vol.21)に掲載予定です。

設計・監理

株式会社 渡辺佐文建築設計事務所

代表取締役会長 渡辺 佐文 (昭和25年建築科卒)
 代表取締役社長 池田 匠 (昭和52年秋田高校卒)
 取締役 櫻庭 星治 (昭和46年建築科卒)
 取締役 北嶋 信義 (昭和47年建築科卒)

〒010-0954 秋田市山王沼田町6-8
 TEL 018-863-8431(代) FAX 018-863-8432
 E-mail:watanabesabun@nifty.com http://watanabesafumi.jp